



子育て情報 10月号

平成 29 年 10 月
椋山女学園大学附属幼稚園

国家百年の大計は教育にあり

園長 横尾 尚子

教育学部に入学したばかりの頃、「教育とは 30 年後の樹を育てるときのものである」という言葉に出会いました。「教育というのは、目先のことだけを考えるのではなく、目に見えないほど遠くに目標をしっかりと定めて、樹木を育てるように日々の細やかな世話(指導)を怠らないことである」という教えであったように思います。教育が成果として実を結ぶためには、相当な時間がかかることに改めて気づかされるとともに、子ども達の将来に思いを馳せる「教育の楽しみ」を教えられたように思います。

もっとスケールの大きい類義語に、「国家百年の大計は教育にあり」があります。「教育の計は百年にあり」とも言い習わされ、人材の育成こそ国家の要であり、長期的視野で人を育てることの大切さを説いた名言として、広く知られています。

明治 9 年(1876 年)、東京女子師範学校附属幼稚園(現在のお茶の水女子大学附属幼稚園)が日本初の幼稚園として誕生しました。それから 140 年ほどの月日が流れ、幼稚園は、上流階級の子息のみが通園できた特別な幼児教育機関から、100%近い子ども達が通う幼児教育(保育)機関の一つとなりました。その拡大と内容の充実に貢献したのが、東京女子師範学校附属幼稚園園長の児童心理学者：倉橋惣三でした。彼は、子どもに自由に遊ばせ、その中から子ども自身の生活やルールに根ざした「自己実現」に至ることを目指し、そのための「誘導」が保育の最も大事なものであるとする「誘導保育」を提唱しました。

多磨霊園の句碑には、自ら育つものを育てようとする心

それが育ての心である

世の中にこんな楽しい心があろうか と刻まれているそうです。

今年 75 周年を迎えた本園開園時の主事であった可知典年の教育方針も、「精一ぱい遊ばせ躰をなす」という「子どもの可能性を導き出す保育」であったそうです。この教育方針は、倉橋惣三とベクトルを同じくするものであり、今日の幼児教育で重視されている「遊びを通した総合的な指導」という考え方に通じるものであります。

こうして始まった我が国の幼児教育(保育)。そのあり方は、幼稚園教育要領や保育所保育指針として示され、これまで大小の改訂が行われてきました。そして、本年平成 29 年(2017 年)にも、国の幼児教育の大きな節目とも言える改訂が行われました。新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の告示です。

今回の改訂では、乳幼児保育・教育から小学校以降の学校教育まで貫かれた「教育において育みたい資質・能力」として、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三本柱が明示され、幼稚園や保育園等での保育活動全般を通して、これら 3 つの資質・能力の基礎が育まれることが目指されています。さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、10 の力(「健康な心と身体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」)を持つ子どもの姿が描き出され、小学校との円滑な接続が強調されました。

文部科学省管轄の幼稚園、厚生労働省管轄の保育所として、分かれて発展してきた幼児教育(保育)ですが、幼保連携型認定こども園の登場や幼稚園における預かり保育並びに子育て支援の充実、さらに小学校教育との接続強化と、新たな方向が見えてきました。我が国幼児教育百年の計は如何に？ 要注目です。